

清末小説から 97

2010.4.1

ユゴーの漢訳名囂俄について(上).....樽本照雄 1
 《物語小説 犬之自述》の原作.....渡辺浩司 9
 哈葛徳小説的首篇中譯 *She* 從曾廣銓到林紓.....郝 嵐16
 晩清小説作者掃描(貳拾貳).....武 禧24
 清末小説から8、15、23、26

研究会から新刊予告です。渡辺浩司著『清末民初翻譯短篇ミステリ論集』を刊行します。これで清末小説研究資料叢書も12を数えることになりました。まだまだ続きます。ご期待下さり

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

ユゴーの囂俄にするとは奇妙に思われるかもしれない。しかし、それが事実だ。なぜそうなったのか。

ユゴーの漢訳名囂俄について(上)

樽 本 照 雄

ユゴーの漢訳名

ヴィクトル・ユゴー(Victor Hugo)の特に姓のほうは、どのように漢訳されてきただろうか。今までの研究にしたがって簡単に列挙してみよう。時間の早い順に示す(#は夏曉虹、*は韓一字による*¹)。

囂俄(1902)、雨苟(一作囂俄1903)、*西余谷(1903)、*由哥(1904)、#胡戈(1908)、*許峨(1908)、岳珂(1914)、預勾(1921)、*雨谷(1925)、雨果(1944)などである。ほかに零俄もあるというが根拠は不明*²。

従来の研究によれば、最初に出てくるのは囂俄だとわかる。

現代中国音で表記すると x ではじま

ユゴーは、いうまでもなくフランスの詩人、小説家、劇作家である。彼の漢訳名は、現在でこそ雨果が定着している。フランス語原音を音写した。ところが、以前は囂俄が普通に使われていた。こちらは英語系ヒューゴーがもとになっている。フランス人の姓を漢訳して英語系ヒ

るのは原音が日本語カタカナ表記で「ヒ」だし、y は「ユ」だ。英語系ヒューゴーに分類できるのは、囂俄、西余谷、許峨など。この x y 以外で h を使う胡戈も当然英語系に入る。フランス語系ユゴーならば、雨苟、由哥、岳珂、預勾、雨谷、雨果などになる。

ただし、姓の読みを2系列に分類したところで、作品原文がフランス語か英語翻訳のどちらであったのかを決定する根拠にはならない。

たとえば、陳景韓がフランス人原作者を漢訳して西余谷とする。陳が底本にしたのは、日本語訳だと思われる。ユゴー原作、思軒居士訳「探偵ユーベル」が候補にあがる。森田思軒は英語から日本語に翻訳した。ならば、森田は英語系ヒューゴーに近い日本語音を当ててもよかった。だが、彼はフランス語系「ユゴー」にした。これでは英語音からはずれぬ。陳景韓はそれに西余谷という漢字をあてた。本来は森田が訳してもよかった元のヒューゴーに、森田を飛び越して到達したということになる。なかなか複雑なのだ。

もっとわかりやすい例をあげよう。曾孟樸は、周知のようにフランス語を理解した。彼の翻訳はフランス語原文からなされたが、著者の漢訳名として囂俄を一貫して使用している。フランス語系ではなく英語系であった。

曾孟樸が関わったと考えられる早い例として『小説林』第1期(光緒三十三(1907)年正月)がある。その「図画」にユゴーの肖像が掲げられた。

法 國 大 小 説 家
囂 俄
結 婚 時 代 小 影



『小説林』1907

それには「法国大小説家囂俄結婚時代小影」と説明される。結婚時代だからなのか、若々しい青年像だ。そういう肖像画もあるらしい。

『小説林』は、曾孟樸が直接参加していた雑誌だ。彼の作品も発表している。曾孟樸が主張すれば、英語系ヒューゴーの囂俄とは別の訳語になっていた可能性はある。あくまでも、かりの話だ。しかし、フランス語系の読みにはしなかった。囂俄のままだ。曾孟樸は、当時すでに広く見られる訳語を採用した。

囂俄の2文字だけをつかまえて、曾孟樸は英語訳本を底本にしたと判断する人はいないだろう。もしそういう人がいるとすれば、曾孟樸についての知識が不足している。ユゴーの漢訳名と翻訳すると

き底本にした外国語は、必ずしも一致するものではない。

ユゴーの漢訳を並べると、不統一でバラバラのように見えるかもしれない。だが、実際に使われたのは圧倒的に蠶俄が多数を占める。

では、なぜ、英語系ヒューゴーの蠶俄なのか。

日本からの影響

この問題について比較的詳しく検討しているのは、韓一宇『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』である。彼女の説明を紹介することからはじめる。

韓は、ひとつの推測を提出する。すなわち、蠶俄は施蟄存のいうように「英語の読み方」からきたのはたぶん正しい。しかし、日本語訳英語音から間接的に転訳した可能性がある、と(69-70頁)。

施蟄存は、蠶俄についてそれが英語訳にもとづく漢訳だと書いた*3。おそらく日本語訳本からの転訳も施は視野に入れているはずだ。しかし、施蟄存は具体例を示して説明しなかった。

韓一宇の説明は、ほかの論文とは違う。蠶俄につながると思われる日本語資料を提出して検討するのだ。研究を一步進めた。そこが新しい。私は、興味深い説明だと考える。韓の推測(70-71頁)を私なりにまとめて【韓】として示す(原文そのままではないからご注意いただきたい)。

【韓】蠶俄が中国に広まった主要な原因は、雑誌『新小説』である。その文章、図、資料の多くは日本から採取された。

韓一宇のこの指摘に私は賛成する。

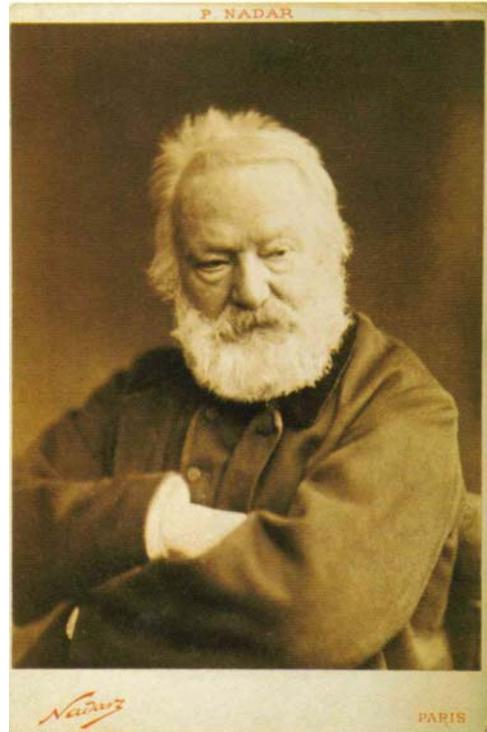
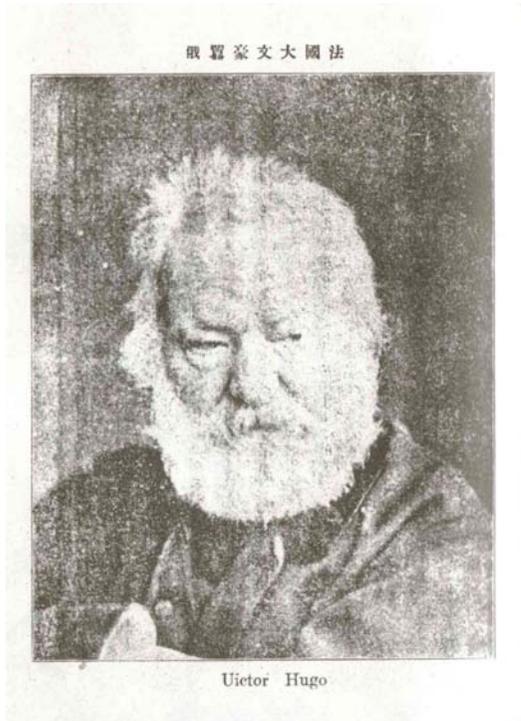
「資料2：ユゴーの漢訳名一覧」を見てもらえば、蠶俄が出現して以後どれくらい広く長く使用されたのかが理解できるだろう。

ユゴーほどの著名な文学者だから、はやくから中国に紹介されているはずだ。普通はそう考える。だが、さかのぼってもせいぜい1900年以後にすぎない。ユゴー作品の日本語訳が刊行されたのは1884年だ。一方の漢訳は、その名前と略歴であれば『新小説』第2号の1902年が最初だし、作品の漢訳となると1903年を待たなくてはならなかった。日本と比較すれば18、19年、ほぼ20年も遅れる。それほど時間差があるとは、すこし意外に感じる。

もうひとつ注目しなければならないことがある。ユゴーが中国に紹介されるには、日本という外国を経由する必要があった。

『新小説』第1年第2号(光緒二十八年十一月十五日(1902.12.14))に「図画」法国大文豪蠶俄 ^マVictor Hugo(小伝付き)が掲げられた。ユゴーの名前が中国人読者の眼に映った最初だ、と郭長海が資料を博捜してそう確認している*4。事実としては最初ではない(後述)。だが、『新小説』に掲載されたのは肖像写真をともなった紹介だった。そのユゴーは、視線を斜め下にやって白髪白ヒゲの頑固そうな表情を見せている。思慮深い雰囲気も感じるができるかもしれない。中国の読者はこの1枚から強い印象を受けたい。写真の威力は大きい。

梁啓超が主宰した『新小説』は、説明



(左) 『新小説』第2号1902年(影印本による)(右)ユゴー 1885年頃『(ユゴー生誕200周年記念)ヴィクトル・ユゴーとロマン派展』東京富士美術館2004

するまでもなく日本横浜で印刷刊行した中国最初の小説専門雑誌だ。日本におけるユゴーの流行が背景にあったことも容易に理解できる。

自由民権運動家の板垣退助は、フランスでユゴーに会った。そのときの挿話は広く知られている。木村毅「日本翻訳史概観」から少し長いが引用する。当時の様子を具体的にいきいきと描写しているからわかりやすい*5。

けだしユゴーの紹介には、板垣退助の洋行がその機運を動かしたことが、大いにあった。例の岐阜遭難の後を受けて洋行した板垣は、明治

十六年、死ぬ数か月前のユゴーを訪問した。その時の両者の問答は、昭和四年、私がフランスに留学したころは、あちらの外交界にその言い伝えが未だ残っており、外交官詩人の名を博していた柳沢健が、よく私に話して聞かせた。

板垣とユゴーの話は全く噛み合わず、通訳を通じてぼそぼそお互に勝手なことを云いあっていたが、話が小説の事に触れてきて、俄然活気を呈した。

「日本のような後進国の国民に広く自由民権の思想を普及するには、どうしたらいいでしょう」と板垣が

尋ねると

「それは適当な小説を読ませるのが一番だ」とユーゴーが答えた。これはいささか意外の答であったので、板垣は追っかけて尋ねた。

「小説とはどんな作を」

「わしがこの二十年以内にかいたものなら何でもいい」

と云って、特にユーゴーは『九十三年』を挙げたと伝わっている。板垣が帰朝した時、船荷におびたしい西洋小説が積まれているのに、出迎えの者は驚いたが、それがユーゴーとの会見の結果の土産であることを聞いて、なるほどと納得した。

これらのこと、当時の新聞に、板垣の知囊・坂崎紫瀾の筆で伝えられているのが、柳田泉によって発見、報告されている。^{*6}

板垣が持ち帰った西洋の政治小説は200余部もあったという。ユーゴーの作品以外に英語小説も含まれていた^{*7}。

日本におけるユーゴー流行を理解するために柳田泉の著作からすこし引用する。

(明治16年以後)板垣退助が後藤象二郎とともに洋行したとき、ユーゴーに会って、政治小説論を吹き込まれ、それにはおれの小説から読ませろというので、ユーゴーの小説を持ち返って自由党関係の新聞に訳載した。しかし当時はまだ読者に文学的理解が欠けていたせい、思った

程は歓迎されず、デュマ、チスレーリだけの人気が出なかった。二十年後に至って、森田思軒という熱心な紹介者と民友社一派の努力とで、ユーゴーの人道思想というものがかなりひろく行きわたり、部分的には相当深く浸透したらしい。^{*8}

「資料1：日本語訳ユーゴー略表」を見れば、1888(明治21)年から英語訳にもとづいた森田思軒の日本語訳が多く発行されていることがわかる。ユーゴーが流行するきっかけは板垣で、実行したのは森田らだったと理解する。

馬君武らのばあい

『新小説』と同じく日本で発行されていた『新民叢報』第27号(1903.3.12)にユーゴーの名前がでていいる。馬君武「茶余隨筆」に収録された中の1篇「菲律賓之愛国者」だ^{*9}。

「雨苛 V.Hugo」と書いてあるだけ。その漢訳は、しいていえばフランス語系ユーゴーになる。

梁啓超が主宰する2種類の雑誌にユーゴーが登場した。そこまではいい。だが、漢字表記が一番手の囂俄と二番手である雨苛のふたつになっている。囂俄は英語系ヒューゴーだし、雨苛はフランス語系ユーゴーだ。表記が分裂したのは、著者が別人だからだろう。もうひとつ、同系列の刊行物とはいえ編集者が異なっていたのが原因だろうか。あえて統一していない。時間の前後を考えれば、囂俄を提出したのは『新小

説』のほうが早い。雑誌の発行月日を見る限り、馬君武はそれよりも遅れているのだから、なにか工夫をしてもよかった。私は、少しいぶかる。

馬君武は、つづく『新民叢報』第28号(1903.3.27)でもユゴーに言及する。「欧学之片影」のなかに「十九世紀二大文豪」と小見出しをつける文章だ。バイロンとユゴーをとりあげた。表記して、「雨苟^{ママ} Victor Hugo」「雨苟者(割注:一作囂俄)法蘭西之大文豪也」(6頁)と書くのだ。奇妙なことに、前は「雨苟」だったが、こちらでは「雨苟」になっている。まぎらわしい漢字だ。いかにも印刷所の植字工が勘違いしそうだとはいえる。前者は誤植で、あとから訂正したつもりだろうか。そこまではわからない。

前号にはない注釈がついている。雨苟に割注して囂俄ともいう、と書かざるを得なかった。これは『新小説』の前例を無視できなかつたからだと考える。

前にふれた陳景韓の「西余谷」は、森田訳にもとづいているがこちらは独自の漢訳である。

庚辰(魯迅)訳「哀塵」(『浙江潮』第5期 光緒二十九年五月二十日(1903.6.15))も囂俄を採用した。それ以後、ほぼ囂俄が当てられている。

ここまでくると周作人が登場する。兄魯迅が林紓の翻訳を好んでいたという回想文にユゴーがでてくることはよく知られているだろう。

周作人の回憶

私は松枝茂夫の翻訳と注釈について短文を書いたことがある*¹⁰。周作人著、松枝茂夫訳「魯迅について 其二」(『周作人隨筆集』改造社1938.6.20)から関係部分を引用しよう。周作人がユゴーの翻訳について思い出をのべる。

その次は林琴南*で、『[巴黎]茶花女遺事』が出て後、出るたびにみな買った。確か最後の一冊は東京神田の中国書林で買った『黒太子南征録』だつたと記憶するが、全部二三十種ぐらゐもあつたらうか。当時「冷血」の文章は非常にハイカラで、彼の訳述した『仙女縁』や『白雲塔』は私も今に荒まし覚えてゐる。そのほかユーゴー(Victor Hugo)の探偵談みたいな短篇小説で『ユーベル[尤皮]』とか何とかいふのがあつたが、非常に面白く書けてゐた。55頁(*は松枝の注を示す。本稿では省略する)

松枝茂夫が翻訳した「ユーゴー」は、周作人の原文では「囂俄」となっている。魯迅を回想することは作人が自分の過去をふりかえることでもある。周作人もユゴーに興味を持って作品を読んでいた。それに関係して彼自身も小説を書いている。

周作人がここで言及している『ユーベル』こそ、さきほど紹介した陳景韓の翻訳にほかならない。森田思軒訳「探偵ユーベル」にもとづいて題名は

「遊皮」に漢訳した。冷血とは、陳景韓の筆名だ。

陳景韓は、漢訳したとき英語系ヒューゴーの西余谷を当てた。周作人は、それを読んでいたが正確な漢訳題名を忘れたらしい。通音する「尤皮」を示したというわけ。題名を忘れるくらいだから、著者の漢訳名である西余谷も記憶になかったのだろう。ゆえに自分で使い慣れた囂俄を書いたと推測できる。

これが1930年代のことだった。

それより約10年前に、周作人は自分のことをのべている*11。彼もユゴーに熱中したひとりだった。周作人「学校生活の一葉」(『雨天的書』北新書局1925.12初版未見/影印本による)から。

そのころ蘇子谷[曼殊]が上海の新聞紙上で「惨世界」を訳載していたし、梁任公[啓超]も『新小説』でよく「ヒューゴー[囂俄]」を話題にしていたから私はヒューゴー[囂俄]の崇拜者となり、苦心惨憺して彼の著作を収集した。やっとのことでなんとか16元の都合をつけて全8冊のアメリカ版ヒューゴー[囂俄]選集を購入したのだった。49-50頁

周作人は、ここでも当然のように英語系ヒューゴーである囂俄を使用している。だから日本語訳もヒューゴーにした。購入したのが英語版の選集だから、その点では囂俄を使用したのは不

思議ではない。しかし、一方で本文が英語版であろうが、著者の表記はフランス語系ユゴーであってもかまわないのだが、と考える。

少し疑問を出しておく。『新小説』において梁啓超がユゴーをよく話題にした、と周作人は説明している。だが、該誌はユゴーの肖像を掲げてその裏側に小伝をつけて説明したほかは、少なくとも翻訳作品は掲載していない。別の刊行物、たとえば『清議報』あるいは『新民叢報』と勘違いしたのではないか。

ずっと時代がさがって1970年ではどうだろう。周作人「七三 籌備雑誌」(『知堂回想録』上冊 香港・聴涛出版社1970.7)において、次のように当時の様子をのべている。

私が南京にいたとき、文学的影響を受けたのは、梁任公の『新小説』に掲載されたあれら、主としてジュール・ヴェルヌの科学小説およびフランスのユゴー[雨果] 当時は英語読みによって囂俄[ヒューゴー]という名前にしていた、だけでもあった。そのほかは林琴南が訳したハガードなどで、後にはスコットがあってその『撒克遜劫後英雄略』は比較のおもしろかった。197頁

魯迅が東京で購入した『新小説』あるいは英語学習書としていくつかの書籍などをまとめて周作人に送ってきたこともある。そのことを言っている。

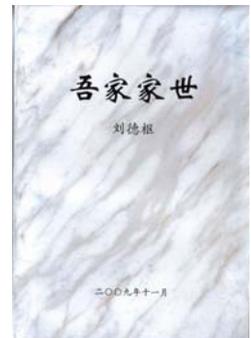
この記述から、周作人は英語系ヒューゴーだと認識して蠶俄を使用していたことが理解できる。 罫

【注】

- 1) 夏曉虹「從“尚友録”到“名人伝略” 晚清世界人名辞典研究」『現代中国』第8輯2007.1。79頁 / 陳平原、米列娜主編『近代中国的百科辞書』北京大学出版社2007.9所収。22頁。韓一字『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』北京・中国社会科学出版社2008.6。68頁注2
- 2) 魯迅「《哀塵》訳者附記」の注釈2。『魯迅全集』第10巻 北京・人民文学出版社2005.11。481頁。ほかに、「禹戈」もある。李青崖「嗚呼、東亜病夫先生」(時萌『曾樸研究』上海古籍出版社1982.8。48頁)に見える。孫引きだからここに記す。
- 3) 施蛰存の文章については、樽本「施蛰存による林紵冤罪事件」(『清末小説から』第96号2010.1.1)を参照のこと。
- 4) 郭長海「雨果作品的中訳補談」吳曉峰主編『中国近代文学史証 郭長海学術文集』上冊 長春・吉林人民出版社2005.3。426頁
- 5) 富田仁が『フランス小説移入考』(東京書籍1981.3.27。224-225頁)においてこのままと紹介している。
- 6) 木村毅「日本翻訳史概観」『明治翻訳文学集』明治文学全集7 筑摩書房1972.10.30 / 1989.2.20五刷。300頁
- 7) 柳田泉「翻訳文学編解題」『明治文化資料叢書』第9巻翻訳文学編 風間書房1959.10.25。13頁
- 8) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15 / 1966.3.10二刷。180頁
- 9) 陳春香「馬君武的外国文学訳介与日本影響」『広西大学学報(哲学社会科学版)』第29巻第3期2007初出未見。中国漢語語言文学網の電字版による。ただし、陳は「雨苟」と誤る。
- 10) 樽本「周作人が魯迅を回想して林紵に言及する 日本語訳注釈について」『林紵研究論集』所収
- 11) 参照：松岡俊裕「關於周作人早期小説《孤兒記》」信州大学人文学部『人文科学論集』文化コミュニケーション学科編第36号2002.3.15

劉德樞著、劉德符編『吾家家世』
私家版2009.11

2009年12月、淮安において「劉鶚逝世一百周年」を記念する催しが開かれた。その活動のひとつとして上記書籍が刊行されたようだ。



黄 惲『蠹痕散輯』
上海正規出版股份有限公司遠東出版社
2008.2

吳双熱与《孽冤鏡》
也説《説部叢書》
周作人訳的《紅星佚史》
曾樸的《恋》
“最早的”科学小説《夢遊天》

《物語小説 犬之自述》の原作

渡辺浩司

1

《小説大観》第九集(上海文明書局,1917年3月30日 - 上海書店・江蘇広陵古籍刻印社1990年6月影印本を使用,影印本は奥付が無く,刊行年月日は『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編,齊魯書社,2002年4月)による)に《物語小説 犬之自述》なる短篇小説が掲載された。書名の下には“毅漢”と書かれているだけで、一見、創作のように見える。『新編増補清末民初小説目録』も創作と見なしている(q1018,592頁左)。

しかし、実はこの作品は翻訳なのである。原作は、Pelham Grenville Wodehouse 『The Mixer』(初出? 『The Strand Magazine』Vol.50-No.299(1915年11月)掲載 『The Red Book Magazine』1916年6月掲載,未見 「I He Meets a Shy Gentleman」という副題がついて、短篇集『The Man with Two Left Feet and Other Stories』(Methuen and Co.Ltd.,初版1917年3月8日,未見 - 第9版1926年)収)である。

Pelham Grenville Wodehouse はイギ

リス人で、1881年生、第二次世界大戦後、アメリカに移り、1975年没、ユーモア作家として有名で、90以上の著作がある。

訳者“毅漢”は、張毅漢のことで、原籍は広東新会、1895年生、1950年没、拙稿で原作を明らかにした《石油礦之報告書》、《還珠》も彼の翻訳である。

2

原作について、雑誌と短篇集を比べると、若干書き換えがある。Wodehouse 作品は、同一のものがイギリス・アメリカ両国で異なる題で発表されることもあり、単行本に収録する際、内容を書き換えることもあるそうなので、この『The Mixer』が『The Red Book Magazine』に掲載された時に、すでに書き換えがあったとも考えられる。ただ、目睹し得たのは『The Strand Magazine』と短篇集第9版だけなので、本稿ではこの二本を基に論を進める。

犬の一人称で語られる『The Mixer』のあらすじを、雑誌版により述べる。

私(犬)は East-end のパブで生まれた。母はすぐれた番犬だったが、私は落ち着きがなく、人間が大好きで、パブではバーテンダーの Fred がお気に入りだった。

四月のある日の午後、内気な男が現われ、主人と話し合い、私を半クラウン(2シリング6ペンス)で買った。私は新しい主人に連れられ、パブを去った。

彼は無口で人を避けているようだった。途中、警官に声をかけられ心配されたのを見て、私はこの男を尊敬した。彼は警官に、今夜、田舎に行くと言った。歩き

THE MIXER.

By
P. G. WODEHOUSE.

Illustrated by
J. A. Shepherd.



続けて部屋に入り、私がたくさん話しかけると、彼は鳴くなど言い、それでも話し続けると、彼は黙るよう言って棒で私をたたいた。彼が新しい主人なので、私は言われたとおりに黙った。

その夜、私たちは田舎に行った。田舎と言えば、Fred の父がケント州で管理人として屋敷に住み込んでおり、Fred も時々そこに行っていた。そんな話を聞いていたので、私は田舎に行きたいと思っていた。田舎に着き、ある家に入ると、Bill という男が出て来た。主人は Bill ととても親しそうに話をした。Bill は、私の容姿が大変まずいと言い、邪魔になるのにどうして犬が要るのか、いつものように犬を黙らせて、中に入って失敬することのどこがよくないのだ等と言った。主人はそれに対し、夜は家に入れるので、犬を黙らせるのは昼しかない、そうすると夜までにもう一匹手に入れるか、或いは、銃を持ったまま一晩中起きていることになるので、チャンスがない等と答えた。そして、この犬をすぐに調教しようとなった。

主人の内気さは、まるで人に気付いてほしくないと思っているようで、いろいろな面倒を引き起こした。最初の晩、私

が台所で寝ていると、誰かが窓から入ってきた。母の教えの通りに吠えようと、明かりがつき、それは主人だった。彼は棒で私をたたいた。私には理解できなかった。それ以降、毎晩、時には一晩に二、三回、同じことが行われ、その都度、私は大声で吠え、主人は私をたたいた。私は考えた結果、母の教えを忘れ、内気な今の主人に合わせるべきだと思った。そこで、次の晩には、誰かが窓から入ってきたが、吠えなかった。すると、明かりがつき、主人は私をなでて褒めてくれ、シチュー鍋をなめさせてくれた。その後、誰かが入ってきて、同じように何もせず寝ていたら、その都度、ごほうびがもらえた。

一週間後の朝、主人は私を連れて外出した。大きな屋敷に入ると、管理人の老人が出て来た。主人は、番犬を買いませんかと尋ねた。管理人は、番犬が今朝、毒を食べて死んでしまい、ちょうど買いたいと思っていたと答えた。私は管理人に5シリングで売られ、主人は去っていった。大変広い家で、管理人はいい人だったが、私は前の主人を思ってふさぎこんでいた。

そこに、バイクの音がし、Fred がやって来た。私はうれしくなって、彼に跳びつき、たくさん話しかけた。Fred も驚き、管理人である父にどこで犬を入手したのかと尋ね、私をいい番犬だと言ってくれた。一泊しかできない Fred は、ここは寂しい所だ等と話し、浮浪者は多いのかと尋ねた。父は、二ヶ月で一人見かけ、この犬を売ってくれた男だと答え

た。前の主人のことだったので、私は Fred に彼を知っているか尋ねた。Fred は、何か聞こえたのか等と言い、ここは、夜は静かすぎて気味が悪いと言った。父が、それならば銃を持って寝るよう言うと、Fred は同意し、二人は二階へ上がった。

Fred に会えた興奮で寝付けず、鼠の臭いがしたので、私は壁の方を歩いた。その時、窓の外で音がした。じっとしていると、窓が開き、人が入ってきた。臭いで前の主人だとわかったので、うれしくなり、危うく声を出しそうになった。しかし、彼が大変内気なのを思い出し、黙って跳びついた。彼は、横になっていると言っただけで、部屋の物を急いで鞆に詰め始めた。

私は、世界で最も友達になりやすい Fred ならば、彼を変えることができると考え、こっそりと Fred を呼びに二階へ行った。部屋のドアをガリガリやっていると、Fred が不機嫌そうに起き出してきた。私が、下にいる男に会ってほしいと言うと、Fred は、何をクンクン鳴いているんだと言い、聞き耳を立てた。下から足音が聞こえたので、Fred は銃を持って下りていき、私は後についていった。前の主人は鞆に物を詰め続けた。私は Fred に彼を紹介しようとしたが、Fred はいきなりどなりつけた。前の主人はずばやく窓から飛び出した。私が呼び止めようとした時、Fred は銃を撃った。Fred の行動にがっかりしつつ、私は外へ飛び出し、彼の後を追った。Fred の父もやって来て、捜し回った。

私は臭いをたどり、大木の下に着いた。上に向かって、怖がることはない等と話しかけたが、返事はなかった。その時、逃げられたと Fred が言っているのが聞こえ、更に木の上から音が聞こえたので、私は Fred らに、彼はこの上にいると叫んだ。Fred がやってきて、木の上に向かい、撃つぞと言うと、前の主人は下りてきた。私は彼に跳びついて、Fred を紹介した。しかし、彼らは全く打ち解けず、Fred は彼に銃を向けたままで、しばらくして彼は男たちに車で連れて行かれた。彼が去った後、私は二人から大いに褒められた。人間は不思議なものだと思い、前の主人のことも考えたが、Fred の父がごちそうをくれたので、考えるのを止めた。母は、自分に関わりのないことに頭を痛めるな等と言っていた。それは見方が狭いとも言えるが、母は常識を大変尊重していたのだ。

タイトル通り交際好きの人なつつこい犬が、環境の変化にとまどいつつ、真相に気付かぬまま、うまく収まる物語で、戦時下を感じさせないユーモア短篇である。

3

中国語訳について述べる。中国語訳は雑誌から訳されている。原作の雑誌と短篇集との異同個所について、翻訳は雑誌の方と一致することからそれがわかる。一例を、雑誌 - 短篇集 - 翻訳の順に示す。主人公である私の容姿を述べる場面である。なお、日本語訳は、梶原信一郎訳

『言はず屋』(『新青年』第八卷第二号(博文館,1927年1月10日)掲載)を参照した*1。

My eyes are brown. I am pure white with one black eye.(516頁左)

(私の目は茶色。私は純白で、片目の周りが黒い。)

My eyes are brown. I am jet black, with a white chest. I once overheard Fred saying that I was a Gorgonzola cheese-hound, and I have generally found Fred reliable in his statements.(56頁)

(私の目は茶色。私はまっ黒で、お腹は白い。前に Fred が私のことをゴルゴンゾーラ・チーズ・ハウンドだと言うのを小耳に挟んだ、それで Fred の言葉は大体は信頼できるとわかった。)

眸子褐色。吾全身之毛。則無處不作純白。惟有一目之旁。則深黑若塗漆。(2頁,句点は原文のまま)

(瞳は褐色。私の全身の毛は純白以外の部分は無い。ただ片目の周りは漆黒である。)

翻訳内容については、物語通りにうまく訳していると思う。ただ、加筆がしばしば見られる。一例を挙げる。私がパブの主人から内気な男に売られる場面である。

“ All right, ” said Master, with a sigh ; “ though it's giving away a valuable dog like that. Where's your half-crown ? ”

The Man got a bit of rope, and tied it round my neck.(517頁左)

(「いいだろう」主人はため息をついて言った「こんな大事な犬をただでやるみたいだがな。半クラウンはどこだ?」)

男は縄をもらい、私の首につないだ。)

主人喟然曰：“無已。其售於子乎。以賤値售去一良犬。爲事良可惜。然君能識貨。則我又何論値。”已又作至微之聲自言曰：“我但愛錢耳。”此聲唯我聞之。又曰：“君之半克郎何在者。即此便可成交易。”

彼人既以半克郎予吾主。乃出繩繫我項。(3頁,コロンの引用符は補った)

(主人はため息をついて言った「仕方ない。それでお前に売ろう。捨て値でいい犬を売るなんて全く惜しいことだ。でもお前は見る目があるから、これ以上値段について論じようがない。」更に一人つぶやいた「俺は金が好きなだけだ。」この声は私にしか聞こえなかった。そして「半クラウンはどこだ。これで取引成立だ。」)

男は半クラウンを主人に渡し、縄を出して私の首につないだ。)

原作にはパブの主人の性格を語った箇所はないので、“我但愛錢耳”という部分は不必要だと思う。

省略は少ない。大きな省略箇所とそれにより生じた齟齬を指摘しておく。原作では、私を買われた後、新しい主人が警官に声をかけられ、環境を変えるよう言われ、今夜、田舎に行くと答える部分がある(517-518頁)。中国語訳ではすべて省略されている。そのすぐ後に、私が新しい主人に、

“Is it true we're going to the country? Wasn't that policeman a good sort? ...” (518頁左)

(「田舎に行行って本当ですか? あの警官はいい人ですか? ...」)

と尋ねる。中国語訳も、

“...頃者與君語之警察爲善人乎。渠囑君往村間。事果確乎。...” (3頁)

(「...さっきあなたと話した警官はいい人ですか? 彼は田舎に行くよう言ったけれど、それは本当ですか? ...」)

と順番は前後しているが、訳している。このため、中国語訳は話がつながらなくなっている。

他には、固有名詞を省略している、「Artistic Temperament」(515頁右,サーカス団)、「Bristol Coliseum」(同,劇場)、「Professor Pond's Performing Poodles」(同,演目)、「Gladys Cooper」

(516頁左,女優)、「Kent」(518頁左,州)。前の三者は実在したか不明。

誤訳と意識的な改訳の区別は難しいが、誤訳と思う箇所を一例挙げる。冒頭の私の自己紹介の一部である。

... and I can still recall the interesting sensation of being chased seventeen times round the yard with a broom-handle after a well-planned and completely successful raid on the larder.(515頁左)

(...また、十分な計画で、食材置き場への侵入が完璧にうまくいった後、箒を持って追いかけられ、庭を十七周した、その時の面白かった気持ちを今なお思い出せる。)

憶有一次。家中人設計捕余。將施懲責。計定。追逐我於廣庭中。有持箒柄者。有持手杖者。余繞庭而狂奔。至十七周。彼等迄不能得余。余乃睨彼輩而笑。彼輩反喘汗矣。(1頁)

(思い出すとこんなこともあった - 家人が私を捕まえ、懲らしめようとし、計画を立てて、庭で私を追いかけた。箒の柄を持った者や杖を持った者がおり、私は庭を駆け回り、十七周もしたが、彼らは私を捕まえられなかった。私は彼らを横目で見ながら笑ってやった。彼らは息を切らし、汗をかいていた。)

もう一点、訳者とは無関係だと思うが、

観 大 説 小



中国語訳の挿絵(9頁)で、描かれている犬が白くない。また、人と同じくらいの大きさで、でかすぎるのではないか。挿絵があること自体すばらしいのだが、中身にも気を配ってほしいと思う。

4

P.G.Wodehouse の父は香港で働いたことがあり、両親は香港で結婚したそうである。彼自身も誕生後すぐに母と共に香港に行き、一年ほど暮らしたそうである。また、一時期ロンドンではあるが、Hongkong and Shanghai Bank に勤めていたそうで、中国と全く無縁なわけではないのである。しかし、彼の作品について、清末民初における翻訳は知られておらず、本稿が初めての論及になるかと思う。1900年代から、とにかく大量に作品を発表しているため、他にも翻訳が存在

する可能性はある。気をつけて探してみたい。

なお、Wodehouse 作品の最初の日本語訳*2は、管見の及ぶ限りでは、梶原信一郎訳『微笑小説 女学校事件』(『新青年』第七卷第八号(博文館,1926年7月1日)掲載)アメリカ発表『Bertie Changes His Mind』(『Cosmopolitan』掲載,1922年8月),イギリス発表『Bertie Gets His Chance』(『The Strand Magazine』掲載,1922年8月),後に前者の題名で単行本『Carry on, Jeeves』(Herbert Jenkins,1925年)に収められた(三作すべて未見),の訳である。《犬之自述》より九年遅れている。

舶来の雑誌を読んで、気に入った作品を翻訳し、それほど間を置かず、雑誌に掲載される、このような雑誌の時代が1910年代半ばの中国にはすでに到来していたのである。 罫

【注】

1)日本語訳は短篇集から訳されている。

この個所の日本語訳を示す。

目は茶色だ。身体は眞黒で腹だけ白い。いつだつたかフレッドがおれを珍しいチーズ・ハンドだと言ったことがある。それ以来フレッドの言説には常に敬意を表してゐる。

(147-148頁)

2)2005年以降、Wodehouse 作品について、国書刊行会と文藝春秋が競うように日本語訳を出版している。本稿とは直接の関係はないが、快挙なのでここに一言記しておく。

【参考文献・ホームページ(HP)】

- Barry Phelps 『P.G.Wodehouse Man and Myth』 Constable and Company Limited,1992年
- John H.Rogers 執筆「P.G.Wodehouse」 - John H.Rogers 編 『British Short-Fiction Writers,1915 - 1945』 (Dictionary of Literary Biography,Volume162)Gale Research,1996年
- Richard J.Voorhees 執筆「P.G.Wodehouse」 - Thomas F.Staley 編 『British Novelists, 1890 - 1929:Traditionalists』 (Dictionary of Literary Biography, Volume34)Gale Research Company,1985年
- Laura M.White 執筆「P.G.Wodehouse」 - Paul Matthew St.Pierre 編 『Twentieth-Century British Humorists』 (Dictionary of Literary Biography, Volume352)Gale,2010年
- 郭浩帆「張毅漢 - 一位被遺忘的小説家」 - 『清末小説』第26号,2003年12月1日
- 森村たまき「訳者あとがき」 - P・G・ウッドハウス著,森村たまき訳『(ウッドハウス・コレクション)それゆけ、ジーヴス』国書刊行会,2005年10月15日
- 「収録作品解題」 - P・G・ウッドハウス著,岩永正勝・小山太一編訳『ジーヴズの事件簿(P・G・ウッドハウス選集 I)』文藝春秋,2005年5月30日/同年6月20日第二刷
- Rod Collins 管理 HP「Your Complete Guide to PG Wodehouse」
<http://www.pgwodehousebooks.com/>
(2009年12月24日確認)
- William G.Contento 管理 HP「The FictionMags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2009年12月24日確認)
- Michel Kuzmenko 管理 HP「The Russian Wodehouse Society」
<http://wodehouse.ru/> (2009年12月24日確認)
- N・M卿管理 HP「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search(アガ・サーチ)」
<http://www.aga-search.com/> (2009年12月24日確認)
- 馬幼垣『実事与構想 中国小説史論釈』台湾・聯経出版事業股份有限公司 2007.9
- 読劉著<《老残遊記二編》存疑>《阿英文集》与《小説三談》 兼論編輯學術論文集諸問題
- 佳人難再 白妞黑妞遺事輯存《八命沈冤》即《警富新書》辨
- 陳平原主編『紅樓鐘声及其回響 重新審読“五四”新文化』北京大学出版社 2009.4
- “五四”前後の林紓 ……王 風
“没有晚清,何来‘五四’?”の兩種読法 ……李 楊
“以晚清為方法” 与陳平原先生談現代文学研究中的晚清文学問題…李 楊

哈葛德小說的首篇中譯 *She*

從曾廣銓到林紓

郝 嵐

賴德·哈葛德(Henry Rider Haggard, 1856-1925)對於今天的中國文學界來說或許非常陌生,但他是晚清文學閱讀的“熱門”作家。因為截止到1916年,他是中國翻譯作品數量居第二位的作家*¹。

哈氏小說在英國風行的時代是在1887-1930年間,他一生共創作了68部作品,其中包括表現當代生活的作品、歷史小說、非虛構類作品、以及眾多的關乎非洲與異地冒險的故事*²,其中後者最為有名。雖然哈葛德在晚清的文學翻譯界佔有數量優勢,但對他作品的正面評價大多都來自後人的回憶*³。其實他在晚清評論界爆得大名還是1905年發生林譯《迦茵小傳》全譯本引發的文壇公案之後。《迦茵小傳》譯自哈葛德的當代社會小說 *Joan Haste* (1895),此書原本技巧平平,故事也不新奇,在英語世界並無殊名。因為眾所周之的原語和譯入語國家的社會與文化氛圍差距,使得這個原本默默無聞的小說成了在近代中國人盡皆知的作品*⁴。

雖然哈葛德小說翻譯的功臣非林紓莫屬(翻譯的數量最多),但事實上哈葛德

譯入中國的第一本小說是曾廣銓翻譯的《長生術》,藍本是哈葛德最為著名的作品之一 *She*。本故事開始連載於1898年《時務報》60期,原作者寫的是“解佳”,“解佳”就是哈葛德。然而,這樣一部在原語文學中生命力持久且旺盛的作品*⁵在中國卻遭受了冷遇。

She 描述一個青年利奧到非洲探詢個人身世,想要解開祖先卡利克雷特的死亡之謎。在那裏他遇到了已經活了兩千年的女王阿霞。阿霞說利奧是卡利克雷特轉世,而且是她兩千年來苦候的戀人。為了讓情人跟她一樣擁有永恆的生命,阿霞帶利奧穿山越嶺,希望他也踏入永恆之火以得到永生。為了消除利奧的疑慮,阿霞像兩千年前一樣踏入火中,沒想到這次永恆之火卻讓永不衰老的她迅速乾枯萎縮,如同木乃伊,並最終奪走了她的生命。

榮格(C.G.Jung)在《探索心靈奧秘的現代人》(*Modern Man in Search of a Soul*)中把《她》中的阿霞當作了“阿尼瑪”(anima)的原型。按照榮格的解釋,“阿尼瑪”就是人類原初的靈魂,表現在男性身上很少帶有一點女性基因。比如感性思維、對外貌美的沉迷、預感性,對自然的感悟等。不過“阿尼瑪”也呈現兩面性:她時而是優雅的女神、時而是詭異的女妖,她用各種各樣的詭計捉弄我們,喚起幸福和不幸的幻覺,喚起憂傷和愛的狂喜。阿尼瑪在古代曾顯形為女神和女巫,中世紀以降,這一女神形象被天國聖母所取代。《她》中的女王阿霞正是領引現代人走向內心世界的不二嚮導。作品中的敘述者霍利試圖向女王阿霞解釋基督教,而這位兩千余歲的女王意味深長的

說：“各種宗教來了又去，種種文明去了又來，它們無一持久，惟有世界與人之原初本性永恆”(“The religions come and the religions pass, and civilizations come and pass, and naught endures but the world and human nature.”)。其實這種對人的精神本性的信賴也正是哈葛德所代表的英國新浪漫主義的主要特徵。

一、《時務報》與曾廣銓

《長生術》連載於《時務報》60-69期，外加最後一集刊登在《昌言報》第一

廣譯五洲近事，則閱者知全地大局與其強盛弱亡之故，而不至夜郎自大，胥井以譯天地矣。祥錄各省新政，則搏搜交涉要案，則閱者知國體不立，受人嫚辱，律法不講，為人愚弄。可以奮厲新學，思洗前恥矣。旁載政治學藝要書，則閱者知一切實學源流門徑，與其日新月異之跡，而不至保八股八韻考據詞章之學，枵然而自大矣。*7

時務報
光緒二十四年閏三月二十一日 第六十冊

福州船政洋監督上船政大臣裕祿條陳
總理衙門王大臣奏續借英德商款指定債款摺
中國時務 論俄人在滿洲興築鐵路情形
英文譯稿 中國時務 論俄人在滿洲興築鐵路情形
中外時務 論俄人在滿洲興築鐵路情形
路透電音 中外時務 論俄人在滿洲興築鐵路情形
日本高麗人士提倡自主 地球輪船及帆船數目
法新式戰艦 長生術 日本商約解義 時務報

每冊 洋一角五分
每月 洋四角
每季 洋一元二角
每年 洋四元
外埠每冊另加寄費

廣東 汕頭 廣東 汕頭
廣西 梧州 廣西 梧州
雲南 昆明 雲南 昆明
貴州 貴州 貴州 貴州
四川 重慶 四川 重慶
湖南 長沙 湖南 長沙
湖北 漢口 湖北 漢口
山東 濟南 山東 濟南
河南 開封 河南 開封
直隸 保定 直隸 保定
山西 太原 山西 太原
陝西 西安 陝西 西安
甘肅 蘭州 甘肅 蘭州
雲南 昆明 雲南 昆明
貴州 貴州 貴州 貴州

洋一分 洋四分 洋六分 洋一分

報如屆時不到請即函告本館
告白價銀資例先行
兩行起碼 一次五元 三十三元五角
九次三元五角 三十六次一元四角
三行起至十五行九角
七行起至十五行八角
封面告白加倍

THE CHINESE PROGRESS

正如報紙的名字所示，《時務報》的內容幾乎全都是關乎時務、新政、實學的。他的內容設“論說”、“諭折”，“京外近事”、“域外報譯”等欄目，另附各地學規、章程等。其中“域外報譯”還包含“英文報譯”、“路透電音”、“東文報譯”等欄目。由於辦刊宗旨符合當時具有維新意識的年輕官僚及廣大知識份子的心理要求，因而剛一問世，便深受讀者歡迎。特別是主筆梁啟超，以雋永流暢的文筆，痛陳改革大政。部分封疆大吏似乎也看出些苗頭，紛紛湊近維新派，或主動捐款，或代為推銷刊物。湖廣總督張之洞、湖南巡撫陳寶箴還飭令省府衙門統一訂閱，然後下發至下屬各單位及書院閱讀。

期*6。
《時務報》是在維新人士壯志未酬的背景下創立的，是資產階級改良派的輿論工具，從資金到人員都與政治運動有密切關係，而報紙的辦刊宗旨從梁啟超發表在《時務報》創刊號上的文章《論報館有益於國事》也可見一斑：

《時務報》發行了總共69期，一共連載刊登了小說5篇*8：其中柯南·道爾的福爾摩斯偵探故事4篇、H·R·哈葛德的小說1篇。對於這兩位作家，《時務報》上的翻譯都是他們與中國讀者的首次謀面。頗富意味的是，在不久的日子裏，這兩位英國維多利亞晚期的通俗小說作家成為中國

近代讀者眼裏最受歡迎的“大小說家”。

從欄目來看，編譯者本意是在這裏向國人介紹西方的新奇，以應和主筆的辦刊宗旨，“廣譯五洲近事”，使讀者“而不至夜郎自大，胥并以譯天地矣”。今天的研究者想當然地把登載在報刊“附編”上的文學作品當作小說，殊不知，當時的譯者與讀者或許並非如看待。我們有理由懷疑《時務報》的編譯者根本就沒有把這些翻譯當作小說，或者是沒有想讓讀者把它當作小說看。福爾摩斯故事可以被視作偵探實錄，《長生術》從名字來看就是想突出它的奇聞軼事感。後者是這個政論性報紙上連載小說的最後一部，也是連載最長，字數最多的一部。與早期刊登在《時務報》上的四篇福爾摩斯故事沒有署名譯者名字不同，《長生術》後寫明：“英國解佳撰，湘鄉曾廣銓譯”。

《長生術》的譯者曾廣銓（1871-1940）生於同治十年一月二十六日江督署中，字靖彝，是曾紀鴻第四子撫給曾紀澤為嗣，曾國藩之孫。他精通英、法、德及滿文。曾廣銓自幼受其祖父曾國藩庭訓，聰明好學，17歲就入縣學。光緒十六年（1890）其父曾紀澤去世時，他剛20歲，以一品蔭生特賞主事員外郎，兵部武選司。因他攻讀了英語，光緒十九年（1893）冬，晉升兵部員外郎，被派充駐英使館參贊。光緒二十五年（1899）任滿回國。光緒三十年（1904）以候補五品京堂出使韓國大臣，時年33歲，為清代最年輕的大臣。曾廣銓在出使韓國期間，繼承其祖父曾國藩和其父曾紀澤的遺風，以儉養廉，發揚祖國的民族精神，曾影響一時。光緒三十二年（1906）因裁缺被召回。以後，先後任福

建興泉永兵備道、雲南迤西兵備道、雲南糧儲道、雲南鹽運使。光緒三十四年（1908）任候補三品京堂出使德國大臣（未就任）。辛亥革命時，曾廣銓解甲歸田。居荷葉富厚堂以耕讀為業。“七七事變”後曾廣銓離開家鄉，先去南寧，民國二十八年（1939）攜侄女曾寶蓀等避居香港，翌年三月二十三日因心臟病卒於九龍，享年70歲。

1893-1899年，曾廣銓任駐英參贊，《長生術》連載於《時務報》時，曾廣銓還在英國。這或許是他任職期間的遊戲筆墨。也正因他時在英國，所以才選擇性地翻譯了一部當時哈葛德最風行的經典作品。不過這部作品並沒有在中國引起多大反響。原因或許很多：曾廣銓沒有像時人風行的一樣對這部作品進行解讀與指導，所以讀者不解其妙，加上《時務報》的讀者只是把它當作域外奇聞而不是小說；而國難當頭的中國人對這個離奇的故事如果沒興趣也可理解。

《長生術》屬於“附編”欄目中，前面與之並列的都是“諭旨、奏章”欄、“英文譯編”、“東文譯編”等欄目，和這些小說同期刊登的不僅有類似介紹外國新發明或者“中國時務”的文章，甚至也有“中緬暹三國交界圖”這樣的地理繪圖；即使是在同一個欄目“附編”中，也只有這一部小說，其他是類似“日本商約解義”或者“法國賽會物件分類名目”等文。特別值得注意的是在《時務報》目錄部分下列橫向寫有一句英文“THE CHINESE PROGRESS”（中國人進步）。不過反諷的是，它所刊載的這幾個通俗小說實在是和中國急於富強的心態無大關係。如

果勉強扯上干係，也只能是用來“廣見聞”的，像早期《時務報》上的福爾摩斯故事是被當作犯罪實錄看待一樣，《長生術》也可能是作為域外奇聞被介紹的。

從篇名看，《時務報》上的這篇譯文仿佛是介紹“長生術”的東西，這個名字或許也是招攬讀者的需要。出現“長生”字樣，在連載的第二冊，即61冊。接續上一冊的第3章：義父子兩人破譯了“磚銘”上的文字，說他的祖先的遭遇：有一女主，“此女主嘗將瓦罐冠人首，知法術，能前知而不死。美而豔……長生火塔一，塔不死滅其聲如雷”。而曾氏譯本中，將父親留給兒子的信翻譯為：“今朕諄諄告誡爾曰：必學長生之術，求此婦人殺之，以釋大仇。而若不能，則子子孫孫或有其人可在火中沐浴不死而王埃及”（61冊）。當然林譯本中也有此語：“誠告吾兒，趨昔斯亨，汝今往尋是人，學其長生之術，乘間殺之以報父仇，則吾願也。設爾畏葸且虞功之不成，則以我言，遺諸來葉後世，必有一人能浴於火中，坐彼佛羅之位”^{*9}。

二、《長生術》的隨意性

登載《長生術》以前，《時務報》上連載的福爾摩斯系列故事，都是短篇，由於其英文原本是偵探懸疑小說，其實是非常好的連載體裁。不過由於《時務報》不是文學刊物，沒有過多版面留給小說，所以四部短篇小說，也都以連載方式出現。但是這四篇福爾摩斯故事的中譯只做到了每一部分的相對完整，還沒有學會將噱頭留在結尾，吸引急於瞭解結果的讀者。其實這對中國人並不陌生，因為這樣的“欲

知後事如何，且聽下回分解”技巧應該早在宋代勾欄瓦肆中使用的話本中就已經有所表現了。

與《時務報》上早期連載特徵差強人意的呵爾唔斯故事相比，曾廣銓譯文的連載具有更大的隨意性，甚至小說喪失了那四篇福爾摩斯故事的相對完整，而是隨刊物的版面隨時終止，下一期繼續。例如第67冊（光緒二十四年六月初一日）上第二十二章只開始了兩行，故事說到女王用意叵測，跟隨他們的臣僕說：“與其女主救而生”，67冊至此為止。十天以後，光緒二十四年六月十一日出版的第68冊上，僕人的這句話才繼續道：“不如聽其自然而死”。一句話沒說完就在中間戛然而止，已經影響了意思的表達。更嚴重的是，《長生術》在第69冊上刊載到第27章的一多半，故事說到主人公他們從岩洞中終於脫身向回走，回程路途險峻，厲風戚戚。此時，“忽見一物飛來，將立我連頭並足渾身蓋住。余大驚，不知為何物。以手摸之，乃知為女主”至此戛然而止。本應在第70冊繼續，但是《時務報》後改名為《昌言報》。因此，曾廣銓譯的《長生術》的結尾在“另一份報紙”《昌言報》的第1冊上。

從每一期的連載篇幅看，《長生術》比過往連載福爾摩斯故事時所占版面要多得多。以前所連載的福爾摩斯，每一期平均只有2個頁碼（含正反兩面），但《長生術》的版面完全固定，每期都是正好三個頁碼，除去最後一部分結尾刊登在《昌言報》第1期上只有1個頁碼。因為固定要填滿三個頁碼的原因，幾乎每一期的結尾都是不完整的半句話。考慮到曾氏此

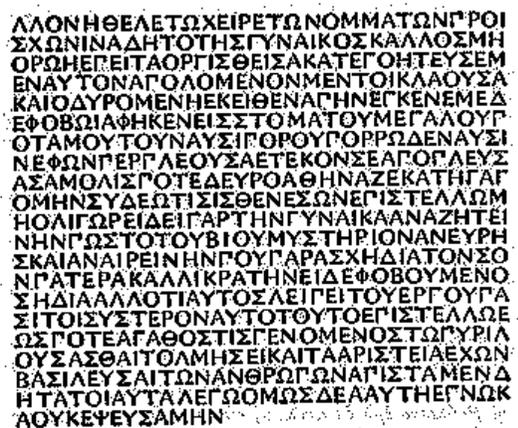
時正在英國，估計是曾廣銓將譯稿全部寄回，由編輯決定連載的分割，因此相當沒有規劃。這與《時務報》前幾期刊登的福爾摩斯故事不同在於，因為那時報紙的譯者本人也或許參與編輯工作，英文報譯可能是隨刊隨譯的，刊載的小說自然可以從文字上斟酌，從篇幅上規劃，讓每一部分相對完整。

曾廣銓的譯文仍然保留了哈葛德小說的章節數目，但是翻譯的是一個梗概，因為每一章都基本保持在800字左右。即使我們認為文言或半文言翻譯比白話文要簡潔，但看看同一部作品林紓的翻譯《三千年豔屍記》他所使用的也是雅馴的古文 短章也要2500字左右，長的章節更是多達6000餘字。曾氏的處理方式既可能是出於版面的需要，也表現了對西方小說地位的隨意性認識。它本來就是在一份認為“報館有益於國事”的談時務的報紙上作為一個附錄，自然細節部分大可不必認真，只是將它作為一個奇談怪想，當成是給讀者的口味調劑。我們不妨看看短短的一篇引文，便可見一斑。

曾廣銓譯本基本是以合併、省略甚至是篡改的方式翻譯出來的。哈葛德的原文中，引文一部分說的是這部小說的緣起。作者強調故事並非杜撰，而是來源於一段邂逅。他與主人公兩人早年有一面之緣，老者貌寢難耐，年輕人極其俊美，但是當年輕的男子與女孩親熱交談時，老者色變，急速離開。這個細節對於我們理解後來老者何利和養子見到無比美貌的女王時，連帶有些許“厭女症傾向”的何利都無法擺脫“她”的吸引具有重要意義。但是在《長生術》中，西方人常見的舞會變

成了“閒步市塵”的路遇，見女色變的情節一概隱去，變成作者、朋友以及主人公的老少二人，共四人“同行而去”。敘述這一段“數年前”的見面，本是為了聯繫起作者突然又獲得何利的信和一本書。但是曾氏譯本中這封信竟然是在他們分手後的“當夕”，自然信的開頭本來說他們曾有一面之緣不覺已經數載，就變成了“迄今寒溫已五更矣” *10。這一段主要是為了簡短的原因，因為我們沒有理由懷疑在英國駐守6年的曾廣銓沒有弄懂，也許曾氏幹脆就是沒仔細看。因為他或許以為這與主要情節無大關係。更嚴重的是，曾廣銓借文發揮，小引部分哈葛德說到何利寄給他的這封信裏面夾著一些物證，potsherd，這應該是一些古老的寫有古希臘文的破碎陶片，英文本第三章甚至有那些陶片銘文的拓片，以證明它的真實度。但是在《長生術》裏，譯者發揮道：“卷中情節過奇，恐遭物議，因將原地古跡貝葉書石碑，均略檢寄數件，以證吾說”（林譯也對此語焉不詳，只是說“稿中尚有標識曰太陽王子及古物之餘片”）。

英文本小說中的陶片文字拓片

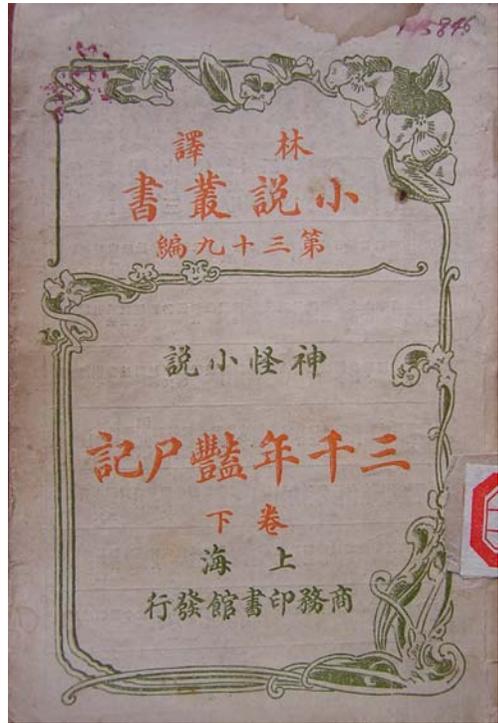


希臘文陶片變成了貝葉書，這或許是因為在當時的中國興盛已久的佛教研究使得近代文人更熟悉古印度的貝葉書，卻對古希臘文化中的陶片銘文非常陌生。既然都是古物，都是古文明留存下來的文字記錄殘片，曾廣銓自然就一廂情願地把它發揮成了“貝葉書”。在帶有佛教色彩的文字遺跡上寫著關於“古埃及國王之女”和古希臘後裔的故事，中國近代讀者也不覺得有何不妥。

第三章是最有意思的一章。因為這裏的英文本穿插了那些涉及古文字的殘片的拓片大大小小11張圖（楔形文字、古希臘文、古埃及象形文、拉丁文等）。文中敘述他們如何破譯對照，英文文字達3000餘字。曾氏譯本的處理非常簡單，應該也是出於報刊連載的有限版面需要，與出版單行本的林譯不可同日而語。他只是說：“檢閱原古文，果系古希臘字，是埃及人所書，所譯之英文尚屬妥善”。幾句完畢。林譯本不厭其煩，將幾乎整個過程，對譯的意思等都已了出來，但是在原文有圖片的地方都加了小字的注“原文不能書”。

三、從曾譯《長生術》到林譯《三千年豔屍記》

1901年，上海商務印書館出版林譯哈葛德的《她》，名曰《三千年豔屍記》，它與曾廣銓譯的《長生術》相隔三年，但沒有明顯證據表明林譯受了曾譯影響。曾廣銓翻譯時代還是19世紀末，1898年的中國對西方的文明和知識還都處在蒙昧階段，甚至一些地名、專有名詞還都沒有統一，更不要說讀者對它們的熟悉程度。



Africa 在曾氏本中被音譯為“亞非利加洲”，1901年的林譯本就是“斐洲”；Athens 曾廣銓譯為“阿田”後邊加注“古希臘國都”，林譯採用的是今天公用的“雅典”。

相對曾譯而言，林紓的譯本就全面、準確得多。不僅細節保留，類似說主人公之一的何利貌寢如同希臘神話中擺渡人過陰陽界河的“查倫”，以及寫信的日期地點“某某堂在康布利（即今天所說的劍橋，筆者注），五月一號，一千八百某年”等都有保留，而且文字流暢跌宕，營造了神秘而濃郁的氣氛。

《長生術》引文部分只寫到作者看到書果然“異夫尋常”想尋找寫信人的時候他們又去西藏了，於是“悵悵而罷”結尾。但是林譯《三千年豔屍記》的“小引”不僅大略說了這個故事，而且特別說

道“威英西及亞爾莎之感情”。這當然令讀者特別關注了這部“神怪小說”中的情感問題。

英文原著中的第一人稱敘述無論是在1898年的《長生術》還是1901年的《三千年豔屍記》中都做了中國式處理：都加入了敘述者的名字。如“佳”(解佳,即“哈葛德”)或者“何禮曰”。曾氏譯本中第一章開頭：“二十年前,禮在書院作夜工課。因試期在即,頗有自負之心,發憤為雄,用心良苦。惟所恨者,余相貌為天下之奇醜”。這裏的“禮”說的是主人公之一,也就是主要敘述者“何禮”。後文又用了“余”,頗有些中國傳統式的夫子自道。用這樣的方式調和西方小說中常見的第一人稱敘事,倒也是個高明的好方法。至少可以減少中國讀者的閱讀混淆,分得清“小引”中的“余”說的是作者“解佳”;正文中的“余”指的是敘述者“何禮”。其實中國讀者是可以分清的,因為即使是林紓本人在寫翻譯小說的序文時,也常常加上今天讀者看似多餘的“畏廬曰”^{*11}等。

在述及主人公龐大而古老神秘的家譜時《長生術》雖然也有省略,但是在將主幹重要部分譯出的同時,不忘對那些拗口陌生的外國名字作詳注。例如在“伊昔士之僧徒”下面。曾氏寫道:“伊昔士,埃及女神,天乃其父,地乃其母。初天為其弟所殺,故從此有晝夜。晝則天生而太陽出,夜則天死而太陽入。固太陽每日死一次,每日產一新太陽”(《時務報》60冊)。他講的是埃及女神伊西斯與奧西裏斯的故事,據估計這一部分是在英文原本中就有的注解,因為哈葛德的書常常涉及

古文明的問題,所以這種注釋在他的小說中並不鮮見,不過這個注釋是否準確有待考察。此外還有第14章對於古希臘神話中神能人語的故事加了詳細的百餘字的注釋,這些在原本中是沒有的。但是因為當時的曾氏正在英國,因此查閱資料或求教他人要比他之前的《時務報》英文報譯翻譯福爾摩斯、或者後來的林紓方便得多。但是在林譯本中卻沒有對“伊昔司”作解釋。林譯本只是對文中的西方人名所具有的含義作了注釋,例如“字義則美而強也”、“言多力之恨人”或者“亦報仇意”。

原文中第二章的一句“at twenty - one he took his degree - a respectable degree, but not a very high one”被曾廣銓譯為“二十一歲考取舉人”(60冊)。而林譯則細緻得多“直至於二十一歲,已得學位,雖非尊貴,然已動人”^{*12}。我們可以認為根本不懂外文的林紓無法真正理解 degree,但是卻正是留過洋(1893-1899年在英國任英使館參贊),相對時人來說非常熟悉西俗的曾廣銓把它翻譯成了“舉人”。這意味著,譯者曾廣銓不是出於不理解,而是出於照顧十九世紀末中國讀者的心理。雖然有些可笑,但也不失為一種方法。

哈葛德小說流行於19世紀下半葉至20世紀初,正是在這個時間段,中國開始將眼光投向西方。如果說中國文學界必須選譯一篇哈氏小說譯介,那麼至少選擇《她》是對的,因為那正是當時英國的流行讀物,是哈葛德繼《所羅門王的寶藏》之後第二篇暢銷小說。但是可惜這樣一篇通俗的冒險故事卻出現在一個不恰當的時間 中國國勢衰微民族危亡感盛行之

時；不恰當的地點 首譯陰錯陽差地刊載在一張嚴肅的政論性報紙上。於是，哈葛德在近代中國的聲望並沒有憑藉其名作《她》建立起來，哈氏成名還要等到林譯全本的《迦茵小傳》之後。 罌

【注】

- 1) 31部，34種譯本，第一位是柯南·道爾71部，131種譯本。
 - 2) 數據參見 Henry Rider Haggard ,King Solomon's Mines , Introduction, Oxford U.P.,1989, .
 - 3) 周作人曾回憶與魯迅同讀林譯哈葛德小說的情景，詳見周啓明：《魯迅與清末文壇》，中國青年出版社，1957年；以及畢樹棠的翻案文章：《科南道爾與哈葛德》，載《人世間》創刊號，1939年8月。
 - 4) 詳見拙文《被道德僭越的愛情 林譯言情小說〈巴黎茶花女遺事〉和〈迦茵小傳〉的接受》，第一部分：“‘茶花女’的風行與‘迦茵’的遭遇”；載《天津師範大學學報》，2003年第6期。
 - 5) 在英語世界介紹到哈葛德時，最常見的就是說“他是小說《她》和《所羅門王的寶藏》的作者”。據不完全統計，《所羅門的寶藏》現存至少29個英文版本，《她》也有18個版本。兩者至少都有8次被搬上銀幕。
 - 6) 《時務報》後期內部出現了分歧，69期以後改名為《昌言報》。《昌言報》第一期注明“續《時務報》第六十九冊”，前後銜接不誤。1898年11月19日，《昌言報》第十期刊登了禁報刊之諭後，隨之休刊。
 - 7) 《時務報》第1冊，1896年。
 - 8) 未含刊載在《時務報》第1期上的《英包探訪喀迭先生奇案》計算在內，因為它明顯不是福爾摩斯系列故事，但是它的原本不明，很難說是譯自一篇偵探小說。
 - 9) 林紓《三千年豔屍記》(上卷)，上海：商務印書館，1914，P29。
 - 10) 《時務報》60冊。
 - 11) 見《離恨天·譯餘剩語》、《鬼山狼俠傳·敘》，或者是“林紓曰”(如《荒唐言·跋》)。
 - 12) 林紓《三千年豔屍記》(上卷)，上海：商務印書館，1914，P20。
- 朱恒夫編著『中国文学史疑案録(修訂版)』
合肥·安徽文藝出版社2008.11
- 近代狹邪小説到底是如何興起的...趙冬梅
怎樣評價晚清譴責小説朱恒夫
誰是蘇曼殊生母嚴杰
林紓翻訊了多少小説朱恒夫
- 余杰『彷徨英雄路 轉型時代知識分子的心靈史』
台灣·聯經出版事業股份有限公司
2009.2
- 「清流」不清 從《孽海花》看晚清之「清流政治」和「清流文化」
棋局已殘，吾人將老 論劉鶚之《老殘遊記》
何處蒼波問曼殊 略論蘇曼殊小説《碎簪記》中尷尬的敘述者
狂飆中的拜倫之歌 以梁啓超、蘇曼殊、魯迅為中心探討清末民初文人的「拜倫觀」 ほか

晚清小説作者扫描(貳拾貳)

武 禧

(一一一)

日本東京田太郎

小説創作：《辽天鶴唳記》

賈生：筆名氣凌霄漢者。托名：日本東京田太郎。

(一一二)

薛俠龍

小説創作：《離恨天》

薛俠龍：筆名(別名)蝥龍。吳江人。其餘未見著錄。

有小説《離恨天》。《離恨天》為上下冊。上冊首頁作者署名“吳江薛俠龍”。下冊首頁署：蝥龍譯述。1913年12月-1915年在上海出版的《雅言》半月刊有署名蝥龍的文章四篇：《世界競爭之大勢與日本之根本國是》、《俄國之東方經濟》、《歐洲之最近形勢》、《日本之地位》。

(一一三)

頤瑣

小説創作：《黃綉球》《雛踪》《復仇與愛國》《虎父犬子》《泪影書声》

湯寶榮(?-1936):原名鞠榮,字伯繁。後字伯遲,號頤瑣,又號頤瑣室主。七歲秉母教。20歲前讀完五經。其後治詞章訓詁之學。曾聽業於德清俞曲園,工詩。與費念慈、江標等訂交。曾兩次參加秋試無功而返。後曾在安徽、江蘇等地為幕室。1909年被張元濟聘入商務印書館,任為總記室。南社詩人沈禹鍾任職於商務印書館時長隨其至南京路樂天茶室,為其忘年交。又與徐仲可、葉楚倫、胡朴安等相唱和。1911年後曾去南京,後回上海。1915年再入商務印書館,多為張元濟代筆。與李宣龔、陳叔通等相友善。1932年之後家境日衰,一病不起,約在1936年-1938年間75歲去世。時其妻史氏77歲,却已經雙目失聰。後陳叔通、張元濟等商務印書館同仁為其公啟募捐云“長日傭書,耄年取給。比以孱軀奄盡,眾藥失靈。殯舍蕭條,一棺空寄。洵極人世之慘怛者矣。乃其夫人,亦踰古稀,復翳雙目。所生都盡,余息何資?念喪亂之未平,終鮮兄弟;欲緩急之可恃,惟求友生。”著作有《頤瑣室已刻詩》四卷、《賓香詞》一卷、《汲古閣漢書校正》、《字學辨正》等。參與校勘《涵芬樓叢刊》、《什九經》等。又有《沪北采風記序》、《徐仲可天蘇閣娛晚圖序》等。

又：關於湯寶榮的籍貫：一說為“江蘇吳縣”(見陳玉堂《中國近現代人物名號大辭典》)。有所見廣告有“吳中名士頤瑣”等(見徐新韻《頤瑣就是湯寶榮》，刊日本2003年7月1日《清末小説通訊》第70期)。但是湯寅撰《湯寶榮事略》(見張人夙《關於湯寶榮(頤瑣)的幾件史料》，刊日本2004年

1月1日《清末小说通讯》第72期)中有汤宝荣“嘗居吴中”一说。可理解为只居住于吴中,并非“吴中人士”。故汤宝荣的籍贯待考。

又:关于《黄绣球》的作者“颐琐”的真实姓名,有汤宝荣、梁启超二说。本文取“汤宝荣”一说。

(一一四)

填恫恨海氏

小说创作:《神州欢梦记》

田桐(1879-1930):湖北蕲春人。字梓琴。又署恨海氏、恨海、玄玄居士,黄帝不肖孙。晚号江介散人。章太炎戏以“水牛将军”称之。曾考取秀才,后入武昌文普通中学堂读书。1903年冬因鼓吹革命,被学校开除,离国赴日本求学。1904年与白逾恒、宋教仁等创办《二十世纪之支那》杂志。同盟会成立,为发起人之一。被选为评议员兼总理书记。因感到同盟会机关报《民报》文理较深,1906年与柳亚子、高旭等编辑较通俗的《复报》。该报是在国内大体编好后,寄往日本印刷出版的特殊报刊。1907年黄冈起义失败,去新加坡主持《中兴日报》,曾与当地保皇派报纸笔战数年。又曾去泗水任《泗滨报》主笔。1909年在北京创办《国风日报》、《国光新闻》。武昌起义,曾参加汉阳保卫战。任战时总司令部秘书长,随黄兴督战。中华民国成立,任南京临时政府参议员。1911年续办《国光新闻》。1912年北京《国民公报》所刊时评称南京临时政府为“南京假政府”。当晚,田桐与同盟会干事白逾恒、仇亮率领同盟会系统的《民主报》、《国光新闻》、《民意报》、

《女学报》、《亚东新报》等7报工作人员20余人,前往《国民公报》报馆问罪,打伤了该报经理徐佛苏、主笔蓝公武,并将承印该报的群化印书馆全部捣毁。宋教仁遇害后,极力主张讨袁,反险遭暗害。在讨袁、护法等问题上,坚持革命立场,曾任中华革命军湖北总司令。但反对孙中山的联俄、联共政策。曾与章太炎、居正等联名发表“护党救国公函”,公开与孙中山对抗。1927年蒋介石发动四一二政变后,他对蒋肆意排除异己,加紧军事独裁表示不满。1928年后历任国民政府委员、立法委员、党史编纂委员等。1929年在上海主办《太平杂志》,从事著述活动,连载政论性著作《太平策》及史料性笔记《革命闲话》,未及完稿即病逝于上海。著有小说《神州欢梦记》。编有《亡国惨记》。有《玄玄遗集》刊行。



田桐照片

(一一五)

悔学子

小说创作:《未来教育史》

悔学子:(未见任何资料·待考)

(一一六)

姬文

小説創作：《市声》

姬文：(未見任何資料·待考)

(一一七)

壯者

小説創作：《扫迷帚》

丁逢甲(1864-約1929)：吳江人。字坤生，号壯者，笔名堃生，室名延月樓。曾任教于周庄沈氏义庄小学。1905年作小説《扫迷帚》发表于《绣像小説》。在小説类征稿中获得第五名，并得到了30元的稿酬。南社早期社員。1915年后在《妇女杂志》发表《论婚制》、《我所見之本地妇女生活现状》等文章倡导妇女解放。撰有《凌兰畦府君行述》。曾为学生王大觉刻印其先人的著作《青箱集》和王大觉本人的《风雨闭门斋诗稿》作序。有《延月樓筆記》。

四

清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します。

成實朋子 近代中国における「童話」
「童話」叢書と『無猫国』をめぐ
って (大阪教育大学) 『学大
国文』第51号 2008.3.31

蘇建新 林紓文化概論 『黒龍江史志』
2009年第18期電字版
2008年中外林紓研究綜述 『福建
工程学院学报』2009年5期(7卷5
期) 2009.10

蔣林 『梁啓超“豪傑記”研究』上海
世紀出版股份有限公司、訳文出版
社2009.1

宋声泉 重估《新青年》同人对“鴛鴦蝴蝶派”的批判 『中国現代文学研究叢刊』2009年第4期(総第129期) 2009.7.15

王木青 鴛鴦蝴蝶派小説の唯情主義 同上
宋劍華、黎保栄 試論中国現代文学的“暴力叙事”現象 『中国現代文学研究叢刊』2009年第5期(総第130期) 2009.9.15

周紹良 李伯元伝 『紹良書話』北京・中華書局2009.8
《老残遊記》中の“白妞”同上

柳和城 商務印書館“橡皮股票”風波豈容否認！ 与汪家熔先生商榷
『中華讀書報』2009.8.15電字版

李爽学 【書評】翻譯歷史 評王德威著
《被压抑的現代性 晚清小説新論》 『台湾觀點：書話東西文学地圖』台湾・九歌出版有限公司
2009.9.10

呂文翠 『海上傾城：上海文学与文化的
転異，一八四九 - 一九〇八』台湾・麦田出版、城邦文化事業股份有限公司2009.11

宋莉華 從晚清到“五四”：伝教士与中国現代児童文学の萌蘗 『文学遺産』2009年第6期 2009.11.15

樽本照雄 清末民初の翻譯小説と日本
『図説翻譯文学総合事典』第5巻
日本における翻譯文学(研究編)
大空社、ナダ出版センター2009.
11.25

『明清小説研究』2009年第3期(総第93期)
2009発行月日不記

中国古典小説中の断片式綴段体結構
以《海上花列伝》為例……………趙炎秋
《民吁日報》与小説有關編年(二) 陳大康
清末民初北京小報小説の語言特色 ……顧迎新
反諷者の眼光与現代焦慮体験：《文明小史》の文化意蘊 ……史修永
林紓訳作卷首題詞小議 ……張春曉
《遊戯世界》所見李伯元佚文 ……龍文展
談談《説部叢書》 ……付建舟